



今、
医療現場では

128 獨協医科大学病院 呼吸器・アレルギー内科



呼吸器・アレルギー内科主任教授
呼吸器内視鏡センター センター長
石井 芳樹

私自身、呼吸器内科学すべてを専門にしているのは、何でも診てやるという好奇心が原点です。内科的胸腔鏡で先駆的な役割を担ってきたのも、今も率先して呼吸器内視鏡を行うのも医療者としての好奇心と向上心とその原動力となっています。

呼吸器内視鏡センターを併設。
アレルギー疾患と呼吸器疾患の
両分野を隙間なく手掛ける
日本最大級の診療科。



獨協医科大学病院呼吸器・アレルギー内科は、日本で初めての「アレルギー内科」として創立され、日本のアレルギー病学をリードしてきた伝統と実績を継承しつつ、呼吸器内科学の全分野を広範にカバーする偏りのない診療科として発展してきました。日本呼吸器内視鏡学会認定施設である「呼吸器内視鏡センター」も併設。大学病院として最新の検査・治療を行いながら、地域の基幹病院として地域医療連携も積極的に進めています。

獨協医科大学病院
病床数：1,167床
所在地：〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880
電話：0282-86-1111 (代表)
URL：http://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m.html

日本初の「アレルギー内科」から 呼吸器内科全般へと診療を拡大

当科は、初代石崎達教授のもと、日本初の「アレルギー内科」として1973年に開設されました。アレルギー専門医が多くいる米国と異なり、日本では、喘息は呼吸器科が、食物アレルギーは小児科が、じんましんは皮膚科が主体に診るのが一般的である中、アレルギー疾患全体を1つの領域として包括的かつ専門的に診療・研究することで、日本の「アレルギー病学」の発展に寄与してきました。喘息における気道炎症/気道リモデリングの機序に関する研究、ハチアレルギーに関する臨床的・基礎的研究を中心に多数の論文を国際誌に発表してきた実績があり、日本のアレルギー診療をリードしてきたという伝統と自負は、当科の支柱の1つであり基盤となっています。ハチアレルギーのアレルゲン免疫療法は日本では保険診療となっておらず、実施施設も限られていますが、これも当科がなすべき治療として行っています。

第2代牧野莊平教授、第3代福田健教授の指導によりアレルギー内科として発展しましたが、99年に「呼吸器・アレルギー内科」に名称を変更。これに合わせて私も赴任し肺がん診療や気管支鏡の指導などを開始して呼吸器疾患とアレルギー疾患の両分野を診療・教育・研究する講座となりました。私は、自治医科大学を卒業後、埼玉県で地域医療に従事しましたが、呼吸器はもとより内科全般から救急まで1人で診なければならない状況を体験。自分の枠組みを決めずに勉強し、喘息も肺がんも肺炎

もアレルギーもと関心を広げ、結果としてどれひとつ捨てることなく全分野を手掛けてきました。診療科の運営にあたっては、アレルギー診療を継承しつつ呼吸器疾患の診療に幅を広げ、現在では、腫瘍から喘息、COPD（慢性閉塞性肺疾患）、間質性肺炎、ARDS（急性呼吸促進症候群）、アレルギー、膠原病、不明熱、感染症、HIVと広範な内科領域をカバーするに至っています。当院は先端医療を担う大学病院であると同時に地域の基幹病院でもあり、当科の担う診療には得意な分野があってはなりません。偏りがなく幅広い臨床能力をもった医師を養成・充足することは、栃木県内の多くの中核病院に医員を派遣し、地域医療連携を強化・推進すべき当科の責務でもありと考えます。

肺がん治療、喘息治療の基幹施設として

赴任当時50床だったベッド数は90床ほどとなり、在籍する医師数も40人に迫り、呼吸器では日本屈指の規模を有する診療科となっています。入院患者数は、2001年の年間約



呼吸器・アレルギー内科スタッフ。レジデントを含めて40名ほどが在籍する。

(栃木県下都賀郡壬生町)



病棟回診。



重症喘息の新しい治療法として2015年4月に保険適用となった「気管支サーモプラスティ (BT)」療法を行う石井芳樹教授。

800人から10年後の11年には約1,400人と大幅に増え、その増加分の多くは肺がん症例です。入院患者数に占める肺がん症例も約60%という状況で、肺がん治療において北関東を代表する施設の1つとなっています。また、アレルギーの代表的施設でもあることから、喘息症例数は日本でも突出しています。

このように症例数が圧倒的に多く、非常に忙しい診療科ですが、臨床研究も活発に行われており、喘息、COPD、間質性肺炎、肺がん、急性肺損傷など多くの分野で最新の研究成果を発信しています。日本アレルギー学会および日本肺癌学会の両学会で活動する施設は珍しく、それも当科のマルチぶりを表しています。

ちなみに私自身の学会などの活動も多岐にわたっており、肺がんについては、北東日本研究機構 (NEJ) 理事、栃木・北関東胸部腫瘍研究機構 (TOTORO) 代表として多数の臨床試験を走らせ、間質性肺疾患については、20年来、厚生労働省の班会議の班員として研究を続けてきました。急性肺損傷については、日本呼吸器学会のARDSガイドライン作成委員会委員としてガイドライン作成にあたり、日本呼吸器内視鏡学会では、胸腔鏡手技・所見検討委員会委員長としてガイドライン作成や普及に努めるなどしています。

重症喘息に対する 気管支サーモプラスティ療法を開始

呼吸器疾患の診断および治療に欠かせない手技である呼吸器内視鏡の有用性と発展性に着目し、赴任当初から呼吸器内視鏡の実施できる環境や体制の整備・拡充に努めてきました。07年には、気管支鏡と、当科が先駆的に取り組んできた内科的局所麻酔下胸腔鏡の両者を扱う全国で初めての専門センターとして「呼吸器内視鏡センター」を設置。安心して患者さんにやさしく、診断精度の高い検査をめざし、呼吸器・アレルギー内科を中心に、呼吸器外科、耳鼻咽喉科、第一外科の医師らが連携しながら、高度かつ先進的な診断・治療を行っています。たとえば、気管支インターベンションとしては、高周波凝固法、アルゴンプラズマ凝固法およびYAGレーザー法などを用いて気管支内腫瘍の治療を実施しているほか、早期肺がん病変に対しては、腫瘍

親和性光感受性物質を注射した後にレーザーを照射し、腫瘍を選択的に破壊する「光線力学的療法」も行っています。

昨年からは重症喘息の新しい治療法である「気管支サーモプラスティ (BT)」療法も開始しています。カテーテルを経内視鏡的に気道に挿入し、カテーテル先端のバスケット電極を気管支壁に接触させ、高周波電流にて気管支壁を加熱することで喘息の原因となる肥厚した気道平滑筋を減少させるもので、従来の内科的治療ではコントロール不能な患者さんへの新しい選択肢として期待されています。気管支鏡専門医とアレルギー専門医が揃った施設でしか実施できず、適応は重症喘息の中でも一定の条件に合う症例だけに限られることから、センター的な施設への集約化が想定されます。欧米の臨床試験データを用いて保険適用となったことから国内での臨床評価はこれからで、当科が中心となって多施設によるスタディを開始する計画を進めています。

同センターの年間検査件数は、気管支鏡が約600件、内科的局所麻酔下胸腔鏡が約60件。修練医も広く受け入れており、ここで呼吸器内視鏡技術を習得した医師が全国で活躍しています。

呼吸器・アレルギー疾患の診療は日々発展しており、化学療法や免疫療法の研究によって肺がんの治療も著しく進歩しています。画期的な治療法も登場しています。そうした最新の治療がもたらす希望と恩恵を、すべての患者さんが均等に受けられるようにするためには、県内の地域医療の充実や病診連携の強化を従来にも増して積極的に進めていかなければなりません。当科の果たす役割はより重要になっています。

いしい・よしき

1982年自治医科大学医学部卒業、埼玉県衛生部に所属し地域医療に従事。88年自治医科大学大学院入学。90年米国アルバーニ医科大学細胞生物学教室研究員。92年自治医科大学大学院修了。93年同呼吸器内科講師。2001年獨協医科大学呼吸器・アレルギー内科助教授。07年同教授。呼吸器内視鏡センターセンター長兼任。13年より現職。日本呼吸器学会 (代議員・指導医・専門医)、日本アレルギー学会 (理事・指導医・専門医)、日本呼吸器内視鏡学会 (理事・評議員・指導医・気管支鏡専門医)、日本肺癌学会 (評議員)、日本臨床腫瘍学会 (暫定指導医)、日本内科学会 (評議員・指導医・総合内科専門医)、日本禁煙学会 (評議員・専門医) など所属。日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医、Infection Control Doctor (ICD)。